

此
丘
詮
海
述

融
通
念
佛
安
心

印
施

019212-000-4

特14-589

融通念佛安心

詮海/述

M22.12

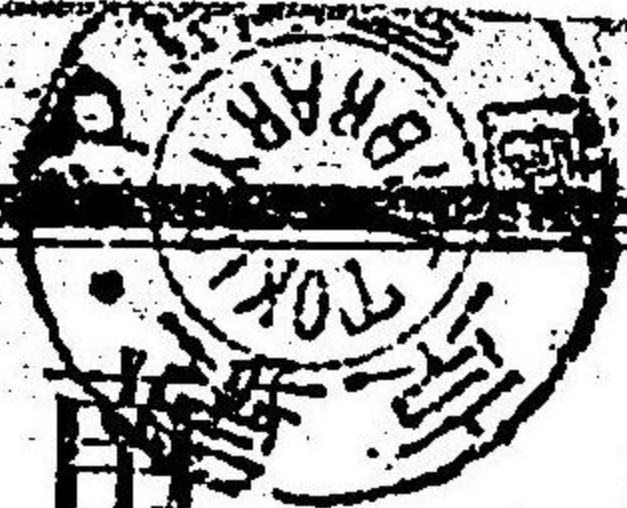
ABF-2804



比丘詮海述

融通念佛安心

印施



融通念佛安心

南無阿彌陀佛と申せば其聲よつきて阿彌陀佛は

とけの來り助け玉ふふと謂れば既に事舊りて

今の世の念佛者よこれぬこの理を辨へぬ人は

何ら志とぞ思ふ左はあれど念佛法門もまた一

途ふらず各己が宗意よ局執して其極り川を

分つて水を飲むよ至る法流のすぢと云なが

ら人情さへ加はりていと煩ぱく然るよ吾融通



念佛は頗るこれらの軌轍より異り曰く融とを和合の義通は隔てふ其義なり自宗と他宗とをへだてて専修と雜行とを隔てて(精進)と(懈怠)とをへだてて善人と悪人とを隔てず上は普賢文珠を始め三昧業成の行者より下を散亂調戲の結縁の機類に至るまで悉く吾がたう人にとりて同行の好み我結ぶ過去際より未來際と盡すまで起滅邊際あることなり之れを名けて大念

佛海と云大海の一滴の滴々よ全潮の功能あり融通の一念は念々よ法界乃功用あり其甚深の道理は歴劫の談よも盡き其殊勝の功德は塵刹乃至も過ぎたり時ある哉永久の昔この法門吾大日本秋津洲よ縁起す大原の上人主として之れ我闡揚し鞍馬の天王擢て之れ我幽賛に三界所有の天衆地類六十余州の神祇冥道一意同心よて法と隨喜して各日課百遍我誓ひ玉

へも何れの人かこの法門よ販入せざらん若王
 入會して之れと勤むとあふば多のれ少かれ先
 づ日課返數と誓ふべし扱て其申す處の念佛と
 捨て、法界の同行衆よ施すべし斯すれば法爾
 の道理とて法界同行の念佛かへつて吾念佛
 となすも亦り吾力わづりあれども分つて法界衆
 人の力大ふるも聚はめて吾身一人の爲と成り
 ぬ之れ我法界の他力と云彌陀本願の他力阿は

が上よまた法界同行の他力添をりていと大
 丈夫なり万縁扶持し善神加護すまればよよりて
 現在當來やすくと助かるべし身の上よ相窮
 まれり嗟呼頼母しいりあ謹で諸人よ白す時は
 末代の人昔過よ及ばせ何よつけても獨功自立
 恐くも成辨志がしりるべし幸よ融通の妙法あ
 り家よ用ひて家齋ひ國よ用ひて國治まると天下
 我卒ひて行らべきはし此の融通妙法なり貴

賤上下一人も残らば此門よ入て念佛く玉ふべ
せんじやうげいちにん のこ このもん いっ ねんぶつ たま
 一この門とは法界の門なり其門よ入りと入る
ひとぐ ひと わ み ため おも わまね ほうかい ため
 人々は獨り吾が身の爲と思はば徧く法界の爲
ひとぐ ひと わ み ため おも わまね ほうかい ため
 と思ひてひたすら念佛すべし是れが却て大
おも ねんぶつ こと かへつ おほ
 きなると吾身の爲の念佛みて有るべし之れを融
きなると わがみ ため ねんぶつ わ こと 融
 通念佛の安心と云
つうねんぶつ わんじん いふ

弘化三年丙午十月十夜

比丘詮海述

明治廿二年十二月十七日印刷

全年 月廿六日御届

編輯兼發行者

奈良縣平民 川中詮隆

大和國葛下郡王寺村 大字王寺壹番地居住

印刷者 大阪市平民 龍雲舎 赤川孫兵衛

東區北濱二丁目 卅四番屋敷

